

2) 肝膿瘍に対する経皮的ドレナージ術の検討

高木健太郎・宗岡 克樹
 真部 一彦・長谷川正樹 (新潟県立中央病院)
 小山 高宣 (外科)
 植木 淳一・畠山 重秋 (同 内科)
 清水 武昭 (信楽園病院外科)

1988年1月より1992年12月までの5ヶ年間に肝膿瘍19例に対し経皮的ドレナージ術を施行した。平均年齢は70.3才，男女比は7:12であった。診断は，腹痛，発熱等の臨床症状と，腹部エコー，CTにて行なった。病因別では経胆道性が最も多く，基礎疾患に肝胆道系の疾患を有するものが多かった。特発性肝膿瘍が4例あった。方法は，エコー下穿刺にて，1本(12例)ないし，洗浄用とドレナージ用の2本(7例)のチューブを留置した。肝膿瘍よりの分離菌では，E. coliが5例と最も多く，菌陰性は3例であった。軽快しチューブを抜去したものは8例あり，平均チューブ期間は30.5日であった。ドレナージ不良にて，瘻孔を拡張しチューブを太くしたものは9例であった。結語：ドレナージ不良に対しては，瘻孔を拡張し太いチューブに交換するか，洗浄用とドレナージ用の2本のチューブを留置する必要があると考えられた。

3) 急性胆嚢炎に対する経皮経肝の胆嚢ドレナージ (PTGBD) の検討

羽賀 正人・伊東 浩志
 松田 達郎・畠山 眞
 坂井洋一郎・安達 哲夫 (新潟勤医協下越)
 山川 良一 (病院内科)
 会田 博・斉藤 俊一 (同 外科)
 五十嵐 修

急性胆嚢炎に対するPTGBDの治療成績について検討した。PTGBDの適応は，臨床症状，炎症反応，画像から急性胆嚢炎が疑われ，筋性防御を認めたものとした。対象は当院で施行した16例(男性11例，女性5例)，年齢は57才から93才まで平均73.3才であった。成績は17例中胆嚢穿刺ができなかった1例をのぞき，16例(94.1%)に合併症なく挿入留置でき，全例とも良好な経過を得た。また80才以上の6例を含め9例(53.8%)がPTGBDのみで治療が完了した。よって全身合併症の多い超高齢者においても，PTGBDは急性胆嚢炎の初期治療として有用であると考えられた。

4) 急性胆嚢炎として緊急の経皮的胆嚢ドレナージを施行した胆嚢癌症例の検討

佐藤 攻・清水 武昭
 杉本不二雄 (信楽園病院外科)

急性胆嚢炎を合併した胆嚢癌症例の術前診断および手術は，かなり難しいとされている。そこで，急性胆嚢炎または慢性胆嚢炎の急性増悪として緊急のPTGBDを受けた胆嚢癌症例をまとめ，若干の考察を行った。(結果)①肉眼的Stage別にみた胆石保有率は，Iが62.5%，IIが75%，IIIが33.3%，IVが20.7%であった。このうち，Iの胆石保有例全例(4例)とIVの7例(有石3例)に重症胆嚢炎で緊急ドレナージが施行された。②肉眼的Stage I症例は，いずれも結石充満例であったが，このうち2例は術前に胆嚢癌を強く疑う画像が得られた。③肉眼的Stage I症例は全例に根治手術が施行された。(まとめ)①急性胆嚢炎合併であっても画像所見を詳細に検討することにより，癌の術前診断を得ることが可能である。②手術中，肉眼的に癌と鑑別の難しい炎症合併例であっても，迅速病理検査で確診を得て，適切な術式の選択が可能である。

5) 腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した小児急性無石胆嚢炎の1例

飯沼 泰史・高野 征雄
 三浦 宏二・岡 至明 (秋田赤十字病院)
 中川 悟 (外科)

今回我々は，熱傷が誘因と思われる小児急性無石胆嚢炎症例に対して，腹腔鏡下胆嚢摘出術(以下本法)を施行したので報告する。症例は8歳女児。II度30%の熱傷にて入院後，第3病日より腹痛と発熱が出現し，精査にてDICを合併した急性無石胆嚢炎と診断された。当初はPTGBDにてDICは改善したがその後の経過で，ドレナージチューブのクランプの度に腹痛と発熱を繰返し，保存的治療は困難と考えられた。このため第29病日に腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した。術後経過は順調で，患者は第11病日に退院した。小児に対する本法の適応は確立されたものではなく，また器材の工夫等改善を要する部分も多いが，小児に対しても有用な術式と思われた。